第6回日本薬局学会学術総会
ランチョンセミナー1

調剤薬局における精神科患者さんへの服薬指導

日　時

2012年10月27日（土）12：15～13：15

会　場

ホテルニューオータニ博多3F 芙蓉の間 雅
福岡市中央区渡辺通1-1-2

座　長

帝京平成大学　薬学部　教授　薬学博士
森本　一洋 先生

演　者

桶狭間病院 藤田こころケアセンター 薬剤部長
宇野　準二 先生

共　催

第6回日本薬局学会学術総会
共和薬品工業株式会社

調剤薬局における精神科患者さんへの服薬指導

桶狭間病院 藤田こころケアセンター 薬剤部長
宇野　準二 先生

近年、わが国では、うつ病などの気分障害、統合失調症、不安障害、認知症、発達障害といった精神疾患により医療機関を受診する患者が急増している。

厚生労働省の患者調査によると、受診者数は2008年の時点で323万人を超えており、更に未受診の潜在的な患者も多く存在することが指摘されている。中でもうつ病および認知症では、特に患者数の増加が著しく、1996年から2008年までの12年間に、うつ病では43.3万人が104.1万人に、認知症では11.1万人が38.3万人へと、それぞれ2.4倍、3.5倍にも増加している。

このような状況に対処すべく、厚生労働省は、2010年6月、それまで「4大疾病」と位置付けて重点的に対策に取り組んできた“がん”、“脳卒中”、“心臓病”、“糖尿病”に、新たに“精神疾患”を加えて「5大疾病」とする方針を決定した。

一方、これらの精神疾患に対する薬物治療においても、大きな進展、変化がみられている。

先の患者調査が行われた2008年以降に限っても、新たに、抗精神病薬5剤、抗うつ薬3剤、睡眠薬1剤、アルツハイマー型認知症治療薬3剤が上市されており、更に、一部の抗精神病薬および抗てんかん薬では、双極性障害に対する適応拡大もなされている。

このような現状を考えるに、精神科薬物治療に関しては、これまでのような抗精神病薬は統合失調症、抗うつ薬はうつ病、気分安定薬は気分障害といった定型的な図式は、もはや成り立たなくなってきているといえる。更に言えば、精神科領域について専門的な知識を持っていなければ、薬学的管理は難しいのではないだろうか。

しかし、不眠や身体症状を主訴とするうつ病などは、当初精神科ではなく一般診療科を受診することが多く、また、高齢化に伴って、統合失調症やうつ病の患者が身体疾患治療のために専門診療科を受診する機会も増えてくることが予想される。そして、これらの患者によって、精神科を専門としない調剤薬局に処方箋が持ち込まれることは容易に想像されるため、精神疾患に対する専門的な知識や患者対応は、いずれの調剤薬局においても今後益々必要になってくるものと思われる。

2010年、厚生労働省が発表した自殺防止対策において、調剤薬局の薬剤師には、早期発見のためのゲートキーパーとしての役割が求められている。しかし今後は、これから確実に増加する精神疾患患者に対し、その薬物療法全般に対するゲートキーパーとして、更に重要な役割を果たすことが期待される。その実現に向けて、それぞれの地域に根ざした薬薬連携が、早期に構築されることを切に願う。

宇野　準二 先生　ご略歴

1987年3月　京都薬科大学大学院薬学研究科博士前期課程医療薬学コース　修了（第2期生）
1987年4月　財団法人　倉敷中央病院　勤務
1993年4月　倉敷看護専門学校　薬理学講師
1996年7月　薬品試験室（TDM室）室長
1998年4月　岡山県立倉敷中央高校専攻科　薬理学講師
2000年5月　医療法人　静心会　桶狭間病院　薬剤部長
2008年1月　病院名変更により現職
2012年4月　日本病院薬剤師会　精神科専門薬剤師　取得